

ダウトゲーム

五十嵐貴久

第七回

31

八月二十七日午後一時、中山泰三刑事部長は部長室で朝刊に目を通なかもまたいぞうしていた。

警察庁と警視庁合同の定例部課長会議から戻ったばかりだ。疲れた、とため息が漏れた。

部課長会議そのものは部署間の情報確認がメインで、慣習の意味合いが大きく、長引くことはめつたにない。今日もそうだった。

捜査一課長の相澤あいさわがインフルエンザで休んでいたため、そのフォローをしたが、特に問題はなかった。

ただ、気疲れはある。警察庁キャリアへの配慮のためだ。

読み終えた新聞を畳み、パソコンでメールをチェックした。新宿で女性が刺殺されたと報告があったが、捜査に口を出す立場ではない。いずれ、詳しい報告があるはずだった。

一時半から本庁内で会議があるは、中途半端に時間が空あいている。デスクのリモコンでテレビをつけようとした時、携帯電話が鳴った。ママ、という表示が画面にあった。

結婚したのは十五年前だ。十歳下の妻に子供が産まれたのは四年前で、その時から登録名をママに変えていた。

「私だ。どうした、何かあったのか？」

勤務中、文乃ふみのが電話をかけてくることはめつたにない。かすかに嫌な予感があった。

「もしもし、あなた？ 文乃です……たつた今、家を出ました。

小夜子さよこも一緒です。心配しないで……」

「何を言ってる？」

「あなたは無事なんですか？ 警視庁の桑野くわの管理官がお見えになつて……」

文乃の声がはつきりと震えていた。家を出たとは、どういう意味なのか。

桑野、と中山は眉を顰ひそめた。聞いたことのない名前だ。

「誰だ、そいつは？ 部署はどこだ？」

文乃の声が聞こえなくなり、耳に強く携帯電話を押し当てた。僅わずかな間を挟み、もしもし、と男が言った。

「品川桜署の橋口はしぐち刑事が人を殺した」聞いていただけで不快になるような声だった。「大久保で春野博美はるのひろみという女性を橋口が刺したのを見た」

君は誰だ、と中山は立ち上がった。

「何の話だ？ 新宿で女性が殺されていたと報告があったが、詳しいことは聞いてない。個々の事件についての情報は……」

橋口には問題がある、と男が中山の声を遮った。

「以前、警視庁で暴力団担当だった頃、金やヤクを受け取っている。知ってるか？」

「君はどこかの組員か？」

「これは忠告だ。問題になる前に、橋口を逮捕した方がいい」

「待て。橋口が女性を刺し殺したと言ったな？ 君はそれを見たのか？」

「そうだ、と男が言った。」

「その後、数人の刑事が来たが、橋口は逃げた。故意に逃がしたのか？ 身内をかばうのは警察の悪癖あくへきだな」

そんなことはしていない、と中山は電話を持ち替えた。

「刑事であっても、人を殺せば殺人犯として逮捕する。それはいい。私の妻と代わってくれ」

娘もいる、と男が渴いた笑いを漏らした。

「警察の不正は見逃せない。奥さんと娘さんに危害を加えるつもりはないが、橋口が逮捕されるまで預かる。中山刑事部長……テレビの記者会見でお前を見たことがある。橋口を逮捕しろ。人殺しを野放しにしておくつもりか？」

「橋口が女を殺すのを見たというが、それだけで逮捕はできない。他に証拠はあるのか？ なぜ君は殺害の現場を見たんだ？」

「橋口をマークしていたんだ」まさか人を殺すとは思っていなかったが、と男がため息をついた。「話はそれだけだ。橋口を逮捕して調べればわかる。報道で逮捕が確認され次第、奥さんと娘さんを解放する。あえて期限は切らない。後は自分で判断しろ」

唐突に電話が切れた。すぐ折り返したが、留守電に繋がるだけだった。

中山はデスクの電話の内線ボタンを押し、受話器を取った。捜査一課です、という声がした。

「中山だ。相澤一課長を呼んでくれ」

「すいません、一課長はインフルエンザで……」

そうだった、と中山は舌打ちした。

「長谷部理事官はせべはいるな？ すぐ来いと伝えろ」

返事を待たず、中山は架台に受話器を叩きつけた。手が激しく震えていた。

32

わたしは三歳でした、と有美ゆみが静かな声で言った。

「兄は六歳上の九歳で、家は福幸町にありました。福井湾の近くの

漁村です。何もない港町ですが、わたしは大好きでした。今も思い
だします」

「……そうか」

「わたしは保育園児で、兄は小学校の授業が終わると二キロ離れた
保育園まで迎えにきて、一緒に帰るんです。子供の頃、わたしは人
見知りで、兄だけが遊び相手だったんです。二人で毎日過ごし、そ
れだけで幸せだったんです」

「それで？」

「一九九四年十月一日……あの日を忘れたことはありません。わた
しと兄は海岸へ行つて、波打ち際で砂遊びをしていました。わたし
たちの前に男が現れたのは陽が沈む直前で、一緒に遊ぼうと言った
んです。なぜかわかりませんが、怖くなって泣き出したわたしの手
を兄が引いて、二人で家へ向かいました」

有美の唇がかすかに震えていた。

「いきなり男がわたしの腕を掴んで、抱き上げました。止める、と
兄が叫んだのをはっきりと覚えています。男は三十代くらいで、三
歳のわたしには怪物のように見えました。でも、兄は飛びかかって
いったんです。落ちていた流木を拾って、男の臍を思いきり殴りま
した」

「それは……すごい勇気だな」

「男が足を押さえてしゃがみこみました。その隙にわたしは逃げたんです。走れ、と兄が叫び、わたしは家の布団部屋に駆け込んで隠れました。どんなに怖かったか、誰にもわからないでしょう」

「お兄さんは？」

帰ってきませんでした、と有美が目をつぶった。

「気がつくど、夜になっていました。物音で母が帰宅したのがわかり、お兄ちゃんが変な男に連れていかれたと訴えたんです。すぐに母は警察に電話しました」

「警察は？ 調べたのか？」

「制服警官が家に来たのは夜七時ぐらいだったと思います。近所の人たちと一緒に兄を探しましたが、見つかりませんでした。一九九四年です。その頃は日本人が拉致らちされている事実を誰もわかっていなかったんです。報道もされていなかったと思います」

「お兄さんはその男に拉致された……そうだね？」

「間違いありません。でも、あの時はそんなことがあるなんて、誰も思っていないませんでした。誘拐の可能性を警察は考え、兄の行方を捜したんです。でも、わたし以外目撃者はいませんし、三歳の子供の証言は当てにならない、と判断されたようです。一九八八年、拉致問題が国会で取り上げられましたが、マスコミは報道していません。それまでも同じような事件が何十件も起きていましたが、すべ

て犯人不明の誘拐もしくは蒸発としか認知されていなかったんです。
梨^リ緑^{リョク}共和国による組織的な犯罪とわかったのは九十七年でした」

「……そうか」

「正確に言えば、わたしの兄について、政府は今も拉致被害者と認定していません。証拠がないからです。他県でも同様の事例は多く、特定失踪者と呼ばれています。二〇〇二年以降、政府は特定失踪者の調査を始めていますが、兄のことは何もわかっていません」

志郎^{しろう}は何も言えなかった。事実の重さだけが心に残った。

北陸地方にはそういった事例が他にもあります、と有美が小さく息を吐いた。

「でも、ほとんどが拉致被害者と認められていません。二〇〇六年、中学に入った時からずっと調べ続けています」

「そうか」

高校の同級生に城下^{しろした}先生の姪^{めい}がいました、と有美が言った。

「彼女を通じて兄は拉致されると訴えました。先生は県議会で取り上げてくださいましたが、何も変わりませんでした」

「悔しかっただろう」

わたしはそういう人生を歩んできました、と有美が肩を落とした。

「わたしを抱き上げた男から救ってくれたのは兄です。あの時、兄はわたしを捨てて逃げることもできたんです。でも、そうしなかつ

た。わたしの身代わりになって、拉致されたんです。今度はわたしが兄を救い、あの時のお礼を言う……そう決めています」

有美の目にうつすらと涙が浮かんでいた。よくわかった、と志郎はうなずいた。強い風が吹いて、窓が鳴った。

33

理事官の長谷部玲二れいじが目の前で立っている。捜査一課のナンバーツーだ。

春野博美の件について報告しろ、と中山は命じた。本日午前十一時半過ぎ、と長谷部が口を開いた。

「新宿区大久保東町二丁目のマンションで女性が殺されたと通報がありました。通報者は不明です」

目撃者がいると聞いた、と中山は声を荒らげた。

「犯人の顔を見たと言ってるそうだな。刺し殺したのは刑事だと……」

確かにそうですが、と長谷部が首を傾かしげた。

「部長はその情報をどこから得たんです？」

地獄耳なんだ、と中山は突っぱねた。妻子が誘拐されたとは言えない。

現場に品川桜署の橋口刑事がいたと通報者は話しています、と長

谷部は言った。

「おそらく、通報者自身が目撃したんでしょう」

「橋口の名前を言ったんだな？」

「そうです」

「なぜ名前を知っていた？」

「わかりませんが、橋口は数年前まで本庁勤務でした」組織犯罪対策部で私の下にいた時期もあります、と長谷部がうつむいた。「通報者が橋口を知っていたのは、そのためかもしれません。橋口は事故を起こして、品川へ転属しています」

「事故？ 暴力団員を撃ったあの件だな？」

中山の脳裏に橋口志郎の顔が浮かんだ。

「それはいい。大久保の事件について、詳しく知りたい」

「通報の五分後、本庁及び所轄の刑事が現場に向かいました。全員がマンション内で橋口を見えています」

「本当に橋口がその女を殺したのか？」

中山はデスクを平手で叩いた。まだ結論は出ていません、と長谷部が言った。

「ただ、女の部屋から出てくる橋口をマンションの住人が見えています。室内から橋口の指紋も出ました。発見された時、春野博美の体から血が流れていたと報告が入っています。状況だけを考えれば、

橋口が殺した可能性はあります」

「なぜ今まで報告しなかった？」

「詳しい状況が判明したのは十分ほど前です。それとは別に、インターネットのSNS上に橋口が新宿で女を刺し殺したと書き込みがあった、とサイバー犯罪対策課から連絡がありました。通報直後で、作威が感じられます。不確かな情報を上げるわけにはいきません」

「もっと早く報告するべきだったな。現職の刑事が殺人犯なら大問題になる。わかりきった話だろう」

事態の確認が先だと判断しました、と長谷部が言った。

「橋口の身柄を押さえるため、緊急手配を命じています。対応が遅れたわけではありません。部長に報告する段階ではないと——」

「刑事が現場に向かったと言ったな？ どうしてその場で逮捕できなかった？」

「突っ込んできた車に橋口が乗り、逃げたということです」運転者は女性で、協力者でしょうと長谷部が言った。「ナンバーは判明しており、関東運輸局に照会依頼して車の所有者を確認中です。すぐに報告が入るでしょう。付近の防犯カメラもすべて調べています。橋口の確保は時間の問題です」

まずいぞ、と中山は立ち上がった。

「現職の刑事が女を刺し殺した？ どうなると思ってるんだ？ ど

れだけ叩かれるかわかってるのか？」

「しかし……」

品川桜署の署長が辞めて済む話じゃないぞ、と中山は長谷部を睨みつけた。

「こっちにも火の粉が降りかかってくるだろう……橋口はどこにいるんだ？」

調査中ですとだけ言って、長谷部が口をつぐんだ。何かを察したのか、目付きが陰しくなっていた。

「橋口を探しているのはどこの部署だ？」

三係と新宿区内の所轄署です、と長谷部が答えた。

「部長、橋口は協力者の女と車で逃げています。ナンバーも車種もわかってるんです。既に関係各所への手配は済ませました。数時間以内に橋口を確保できると——」

冗談じゃない、と中山は怒鳴った。

「単なる殺人事件とは訳が違う。最悪の不幸事だ。すぐ橋口を見つ
ける。三係？ 所轄署？ そんな生ぬるいことをしてどうする？
二十三区内の全警察署に通達を出し、橋口の確保に専念させる。わ
かったな？」

「しかし……これは個人的な意見ですが、橋口がその女性を殺した
とは思えません。他にも事件は起きています。二十三区内の全警察

署というのは……」

「橋口が女を殺したのか、そうではないのか、身柄を押さえればすぐわかることだ。そうだろうか？ 彼を信じたいという気持ちはわからなくもないし、作為……橋口が畏にはめられたのかもしれない。

だが、女が殺されたのは事実だ」

「その通りです」

橋口が女の部屋にいたのも確かだ、と中山は額の汗を拭った。

「犯人ではなくても、何か知っているはずだ。違うか？ 何であれ、奴には事情を説明する義務がある。命令だ。二時間以内に見つける！」

「了解しました」

これは刑事部長命令だ、と中山は座り直した。

「二十三区内の全警察官を動員して、橋口を探せ。本庁刑事部捜査一課三係に専従班を設置、捜査支援分析センター、その他関連部署に協力を要請、橋口の身柄確保を最優先とする」

「はい」

「銀行、クレジット会社に情報提供を命じろ。金の動きを追うんだ。キャッシュディスプレイペンサーから金を引き出せば、どこにいるかすぐわかる。カード払いも同じだ。コンビニチェーン、スーパー、デパート、その他考えられる限りの会社に協力を仰げ。隠れるといつて

も場所は限られる。ホテル、サウナ、ネットカフェ、とにかく全部当たれ。必ず橋口を見つけたら」

「はい」

マスコミも使え、と中山は視線を外した。

「顔写真を出しても構わない。一般からの目撃情報を募るんだ。どんなことをしてでも奴を確保しろ。万一だが、長引くようなら指名手配も考えざるを得ない」

待つてください、と長谷部が半歩前に出た。

「現段階で橋口は容疑者と言えません。参考人ならともかく、指名手配というのはさすがに……」

そんなことを言ってる場合じゃない、と中山は顔をしかめた。

「重要なのは、一刻も早く奴を押さえることだ。私だって、橋口が犯人でなければいいと思ってる。だが、奴が女を殺していたらどうなると思う？ 君が考えているより、警察不信、検察不信の声は根強い。下手をすれば、総監の進退にまで話が及ぶかもしれない。何としても奴の身柄を押さえなければならぬ。逃げているのは、後ろ暗いところがあるからだろう。そうでなければ堂々と無実を主張すればいい。身の潔白を証明する義務が奴にはあるんだ。今のままだと、埒が明かない。警視庁が橋口をかばっているわけではないと示すためにも、強い態度に出るべきだ」

私は橋口を知っています、と長谷部が肩をすくめた。

「例の件で本庁勤務から外されましたが、人殺しをするような男ではありません」

あの件は覚えてる、と中山は歯を食いしばった。

「三年前か……あの男のせいでもれだけ迷惑を被ったか。品川に飛ばしたのは私だ。君も一時的にだが方面本部に回されたじゃないか。なぜ奴をかばう？　トラブルメーカーだぞ？」

「あれは橋口だけの責任ではなかったと思います」

「奴が発砲したのは事実じゃないか」

同僚の刑事を救うためだったんです、と長谷部が言った。

「まだ若いですが、刑事としての能力は高く、我々のやり方もよく知っています。大量の警察官を動員すれば、こちらの動きに気づくでしょう。裏を搔かかれるかもしれません。どんな事情があるのかわかりませんが、指名手配すれば地下に潜もぐりかねません。ますます面倒なことになると考えますが」

「そういう問題じゃないと言ってるだろう！」

中山は挿んだボールペンを二つに折った。

「いいか、これは命令だ。絶対に橋口を捕まえろ。必ず見つけて、ここへ連れてこい！」

私も彼の話を聞きたいと思っています、と長谷部がうなずいた。

「必ず身柄を押さえます。ですが……ひとつだけ聞かせてください。部長、何があったんです？」

「何もない」

「橋口を追い詰め、逮捕してどうするつもりですか？ 確保の必要性は私も理解しています。現職刑事が殺人を犯せば、市民の警視庁、警察庁への信頼が揺るぎかねません。しかし、まだ情報も出揃っていない段階で指名手配というのは――」

「理事官の立場ではわからないだろう」

中山は吐き捨てた。妻と娘を正体不明の男に誘拐された気持など、わかるはずがない。

声だけの印象だが、危険な男なのは間違いない。何をするかわからなかった。

我々、と一度だけ言っていたが、何らかの組織がバックにいるのだろう。おそらくは反社だ。

警視庁刑事部長の妻子を誘拐し、橋口の逮捕を要求している。三年前まで、橋口は本庁組織犯罪対策部に籍を置いていた。

中山は深く息を吐いた。過去に橋口が逮捕した者が復讐している。要求に従わなければ、妻と娘は殺されるだろう。

「橋口の身柄を押さえる義務が警察にはある」

確かにそうです、と顔を伏せた長谷部に、煙草たばこを持っているかと

中山は尋ねた。

「持っていますか……禁煙されているのでは？ お嬢さんが嫌がる
と——」

ポケットのラークをパッケージごと長谷部が差し出した。どうだ
っていいだろうと乱暴に答えて、中山は煙草にライターで火をつけ
た。

Part 3 裏切り

1

チャイムの音に志郎と有美は同時に顔を上げた。壁のボタンを有
美が押すと、若い男の姿がモニターに映った。

「すいません、警察です」

制服警官だった。反射的に志郎は隠れようとしたが、意味がない
ことに気づいた。向こうからは見えていない。

「何でしょうか？ 今、食事の準備を……」

落ち着いた声で有美が答えた。新宿で事件がありました、と警官
が言った。

「逃走中の犯人がこの辺りにいたのは確かで、行方を追っています。

お宅は大丈夫ですか？」

「はい。でも、どうしてここへ？」

こちらだけじゃないんです、と警官が脇に挟んでいたファイルを開いた。

「近くのコンビニの防犯カメラに、犯人が映っていたんです。近隣の家をすべて廻ってまして……この男ですが、見ていませんか？」

ファイルに挟み込まれていた写真のプリントアウトを、警官がカメラに近づけた。キャッシュユデイスペンサーの前に立っている志郎の顔がそこにあった。

「……見てません」

お騒がせしました、と警官が軽く頭を下げた。

「ですが、気をつけてください。凶暴な男です。戸締まりは厳重にお願いします。この男を見かけたら、必ず110番してください」

失礼しますという声と共に、画面がオフになった。凶暴な男、と有美がボタンから指を離れた。

笑えない冗談だ、と志郎は顔をしかめた。

「だが……どうなってる？」

家へ来る前、コンビニに寄りましたよね、と有美が言った。

「あそこで防犯カメラが橋口さんを撮影していたんです」

それはわかってる、と志郎は言った。

「コンビニに寄り、買い物をして現金を下ろした。防犯カメラが撮影しているのは気づいていた。だが、画像は警備会社が管理している。警察が防犯カメラを設置しているわけじゃないんだ」

「それは……そうでしょうね」

画像を調べるのが早すぎる、と志郎は首を振った。

「早すぎる？ どういう意味ですか？」

ここへ来てから一時間も経っていない、と志郎は部屋を見回した。

「おれが大森方面へ逃げたのは警察もわかっていただろうが、場所の特定まではできない。大田区にコンビニがどれだけあるか知らないが、百や二百あってもおかしくない。各店の画像データを持ってるのは警備会社で、それには個人情報も含まれる。警備会社が警察に協力する義務なんてないんだ」

「それはわかります」

簡単に言うが、と志郎はテーブルに肘をついた。

「防犯カメラの画像解析には少なくとも十人以上の専門家が必要だ。全データをチェックしておれを見つけ、顔写真を所轄や交番の警官に配った。交番のコピー機でプリントアウトしていたら、百枚で一時間はかかる。大勢の警官がこの辺りの家を回っている。一軒家、マンション、アパート、店舗、公共施設……すべてを調べるのは百人体制でも無理だ。動員を命じられた警官はその十倍以上いるはず

だ」

「刑事のあなたが春野さんを殺したから？」

君の冗談は笑えない、と志郎は肩をすくめた。

「現職刑事が人を殺せば、警視庁にとって大問題だが、今の段階で千人以上の警官を動かせるはずがない。誰であれ、普通はそんな無茶な命令は出せない」

志郎は腕時計に目をやった。午後二時半になっていた。

「しばらく様子を見てからここを出よう。警察はコンビニ周辺の家を徹底的に搜索している。さっきの警官がドアを開けてくださいと言わなかったのは、君が一人暮らしの女性だからだ」

「どうして一人暮らしだと？」

部屋の広さだ、と志郎は言った。

「外から見てもワンルームだとわかる。コンプライアンス強化で、男性警官が一人暮らしの女性の家に入るのは原則禁止されている。

あの警官は若かった。無理はできない」

そういうことですかとうなずいた有美に、次は違うと志郎は唇を噛んだ。

「その時は室内に入ってくるだろう。警察は車のナンバーで住所を割り出す。今すぐ来たっておかしくないんだ」

友達の車です、と有美が言った。

「今日は有休で、春野さんに会った後、姫原村の片山興産に行くつもりでした。不慣れた場所なので、車の方がいいと思って借りたんです」

不幸中の幸いだな、と志郎は胸を撫で下ろした。

「警察は君の友人を探すだろう。その分時間が稼げる……とりあえず、都心に出よう。人の多い場所なら、目立たずに済む」

志郎はコンビニで買ったマスクをレジ袋から取り出した。

2

刑事部長の直命には従わざるを得ない。長谷部は捜査一課の全刑事に橋口志郎の搜索を指示し、都内の全警察署に協力要請を手配した後、品川桜署に向かった。

事前に署長の沢に連絡を入れ、関係部署の捜査員の緊急招集、橋口志郎搜索本部の設置を命じていた。

この段階で、志郎の行方を追っていたのは本庁捜査一課三係の一部の刑事と新宿区内の警察官だった。指揮を執っているのは三係長の森田^{もりた}だ。

長谷部は命令を差し替え、自分が総指揮官になると通達した。手配に手間取り、品川桜署に入ったのは午後五時過ぎだった。

大会議室に入り、長谷部は奥の席に座った。大沢署長以下、各部

署の捜査員が顔を揃えている。

橋口はどこにいると尋ねた長谷部に、全員が目を逸らした。

「直属の上司は？」

私です、と中年の男が手を挙げた。苛立ちが顔に浮かんでいた。

「刑事係長の藤元ふじもとです。橋口の居場所はわかりません。正直、私は事態を把握していません」

橋口が被疑者への暴行で謹慎処分になっていたと聞いた、と長谷部は言った。

「どうして放っておいた？ 連絡は？ 謹慎中でも定時連絡は警察官の義務だろう」

連絡は取ってます、と藤元が手で顔を拭ぬぐった。

「橋口が処分を受けてから、私を含めうちの連中が毎日橋口と連絡を取っていました。今日の昼過ぎ、本人から電話が入っています」

「どこにいるんだ？」

都内にいるのは確かです、と藤元が言った。

「新宿の件はこっちにも情報が入っています。被害者の女性の部屋にいたのは、橋口も認めていました。いきなり本庁の連中に逮捕されたくない、うちの署に戻って詳しい事情を説明すると言ってました」

他人事みたいな言い方は止める、と長谷部は渋面を作った。

「橋口は君の部下だ。謹慎中であっても、行動を把握する義務があるはずだ」

「面目ありません、と藤元が頭を下げた。」

「ですが、一時間おきに居場所を連絡しろとは言えませんよ」

「開き直ってるつもりか？」

まさか、と藤元が手を振った。

「本庁の理事官にそんなことをするわけがないでしょう……殺された春野博美と橋口の間には面識があったのはわかっています。この三時間、五分おきに電話をかけていますし、留守電に伝言を残してませんが、電源を切っているため、所在は不明なままです。携帯会社に協力を依頼しましたが、難しいということでした」

「言い訳はいい。そんなことより——」

橋口が何をしたらって言うんです、と藤元が唸り声うなを上げた。

「春野博美の部屋に行ったのは確かです。死体を発見したのも橋口ですよ。ドアノブや壁に山ほど指紋がついていたと聞きました。本庁の組対にいた時、理事官の部下だったと橋口本人が話していましたが、奴のことは知ってますよね？ 殺人現場に指紋を残すと思いますか？ 橋口は馬鹿かもしれませんが、間抜けじゃありませんよ」

「被疑者を殴った男だ。春野と話していて、かっとなって殺したとすれば、指紋を残していてもおかしくない」

理由があったんです、と藤元が首を振った。

「橋口は妹を殺されています。理事官はどうです？ 奥さんを殺されても、感情的になりませんか？」

「話を逸らすな。身内を殺されたら、誰だつて冷静ではいられない。だが、暴力を行使していいはずがないだろう」

「もちろんです。だから謹慎を命じました。警察官として間違つたことをしたんですから、当然でしょう。ですが、気持ちはわかります」

「自分が何を言ってるかわかつてるのか？」

藤元、と大沢が苦い顔になった。そのままお返ししますよ、と藤元が薄笑いを浮かべた。

「橋口がうちに来てから、三年ほど経ちます。それなりにあいつのことをわかつているつもりです。筋の通らないことはしない男ですよ。少なくとも、かっとなつて一、二度しか会っていない女性を殺すようなことはしません。それはわかっているでしょう？」

この件は中山刑事部長の直命なんだ、と長谷部は声を低くした。「刑事が市民を殺せば、上層部の責任問題になるし、進退にも関わってくる。橋口と殺された女性の間に何かがあったのかもしれない。誤って刺してしまった可能性もないとは言えないだろう。詳しい事情を本人の口から聞く必要があると私も考えている」

そんな可能性はありません、と藤元が唇の端だけを曲げた。

「そもそも動機がないんです。一度か二度会っただけの女性を殺す理由なんて考えられませんよ。しかも、橋口は現場から警察に通報しています。通信司令センターの担当者に聞きましたが、橋口は驚いていたそうです。当然でしょう、死体を見つけるなんて思ってもいなかったはずです。驚かない方が不思議ですよ。それでも、110番通報したんです。人殺しがそんなことをしますか？」

聞け、と長谷部は藤元を手で制した。

「私も橋口を信じている。春野を殺したと思っているわけじゃない。だが、何か知っているはずだ。なぜ黙ってる？」

昼に電話で話した時、と藤元が言った。

「橋口は駆けつけた刑事を現場で見たそうです。確認しましたが、橋口が通報する直前、女性が部屋で刺し殺された、犯人は品川桜署の橋口刑事だという通報があったと聞きました。だから、刑事たちは橋口を犯人だと考えたんです。奴は何かがおかしいと直感したんでしょう。勘のいい男です。嫌な臭いを嗅げば逃げますよ。本庁が橋口を疑っているのも気づいているはずですよ。警察は予断と偏見の塊ですから、とりあえず身を隠すと決めたんだと思いますね」

それが事態を複雑にしている、と長谷部はため息をついた。

「橋口をかばうつもりなら、間違っている。かえって奴が不利にな

るだろう。出頭して何があったのか話すべきだ。奴を逃せば、君の責任問題になる。辞職するつもりか？」

冗談でしょう、と藤元が言った。

「地方公務員は潰しが利きません。再就職先を捜すのは厳しいですよ。しかし、部下を見捨てた係長はいずれ辞めざるを得ません。それが警察という組織です。かばってなどいませんし、橋口を見つめるつもりです。言われなくても説得して、出頭させますよ」

君の態度には問題がある、と長谷部は藤元を睨んだ。

「警察は階級がすべてだ。君は警部補だろう？ 警視正に対し、それなりの敬意を持って接するべきだろう」

私はあなたのことを知りません、と藤元が肩をすくめた。

「ただ、橋口はあなたを信頼していました。警察官として、上司として、人間として尊敬できる人だと話してたんです。奴がそう言うなら私も信じよう、そう思っていました。こんな無茶な話は聞いたことがありません。橋口一人を逮捕するために、東京中の警察官を動員する？ 馬鹿らしくて話す気にもなれませんよ」

「中山刑事部長の命令で——」

こんな無法な命令を通すなら、理事官なんていなくても同じです、と藤元が言った。

「警察官の犯罪が増えています。世間から非難されるのは当然です

よ。何よりまずいのは、警察官が警察官の犯罪の意味をわかっていないことです。検察庁の検事長が賭けマージャンで起訴された事件がありました。上から腐ってるんでしょう」

「関係のない話だ」

ありますよ、と藤元が身を乗り出した。

「腐った上を見習って、下も腐り始めています。それでも、諦めていない刑事が警察を支えているんです。橋口もその一人で、優秀で熱心な男です。あなたはそれを知っているはずだ。違いますか？ 奴は自分が窮地に立たされているとわかっています。様子を窺^{うかが}っているだけで、いずれは出てきてすべてを話すでしょう」

待っているわけにはいかない、と長谷部は天井に目を向けた。

「今、重要なのは——」

そんなことはわかってます、と藤元が言った。

「うちも署を挙げて橋口を探しています。その責任があるのは確かです……理事官に伺いたいのは、本庁が何を考えてるかです。繰り返しになりますが、この体制はどう考えたっておかしいでしょう。奴がテロリストで、東京中にサリンをばらまくつもりならともかく、もし橋口が女性を殺したとしても、単なる殺人犯に過ぎません。警視庁が総掛かりで奴を探す理由は何です？」

そこをきちんと説明してもらわないと、確保だ逮捕だと言われて

も納得できませんね、と藤元が横を向いた。

わからなくもない、と長谷部は尖った鼻梁ひりょうに触れた。

「だが、この件は——」

藤元の胸ポケットから着信音が流れ出した。

「公衆電話です」

画面に目をやった藤元が低い声で言った。

「……橋口か？」

「そうですね」

どこにいるのかを聞き出せ、と抑えた声で長谷部が言った。

「ここへ戻るように言うんだ。逆探知を始めろ。橋口の位置を探れ」

大沢がうなずくと、二人の係長が同時に大会議室を飛び出していた。

七回目のコールが鳴り、藤元が画面に触れた。スピーカーホーンに切り替えると、橋口です、と疲れた声が大会議室に広がった。

「何してる？ 今どこだ？」

銀座です、とくぐもった声が出た。

「何が何だか……こっちが聞きたいですよ。スマホの充電は切れるし、そこら中に警察官がうようよいます。テレビで見ましたが、ぼくが春野さんを殺したことになるんですか？」

「違うのか？」

喉の奥で笑った藤元に、勘弁してください、と不快そうに志郎が言った。

「警察がぼくを追っているのはわかってます。本気でぼくが彼女を殺したと思ってるんですか？」

「説明すると長くなる。とにかくこつちに戻れ。本庁もうちも、お前が犯人だと考えているわけじゃない。ただ、現場にいたのは確かだ。違うか？」

「いましたが……」

「詳しい事情を話す責任がお前にはある。それはわかっているはずだ。今すぐ戻れ」

「了解です」

「待ってる。悪いようにはしない。俺たちを信じろ……それにしても、スマホの充電ぐらいしておけ。刑事だろ？」

電話が切れた。同時にドアが開き、係長の一人が飛び込んでくる。

「逆探知成功しました。中央区銀座七丁目第1247公衆電話。生香堂ビルの二階です」

「大至急、銀座を警邏中の警察官に連絡」長谷部は机を叩いた。「銀座六、七、八丁目を包囲して、橋口を確保しろ。ここからも人を出せ」

もちろんです、と大沢がうなずいた。藤元がスマホを上着の内ポケット

ケットに入れ、空いていた左手で額の汗を拭った。

橋口が人を殺したとは私も思っていない、と長谷部は立ち上がった。

「だが、今は彼の話を聞くことが最優先だ。銀座か……警察官の数は多い。橋口を確保できるだろう。万一、包囲を抜けたとしても、奴はここへ戻ってくる。確保できればそれでいい」

うなずいた藤元に、ポケットから手を出せ、と大沢が舌打ちした。

「それが理事官と話す態度か？　どうかしてるぞ」

失礼しました、と藤元がポケットから手を抜いた。

3

署に戻る、と志郎は受話器を置いた。わかりました、と有美がうなずいた。

大森から京浜東北線で有楽町に出て、その後銀座までは徒歩だった。人込みに紛れて移動を続けていれば見つかりにくい、と経験でわかっていた。

考えてみれば、逃げる必要なんてないんだと志郎は言った。

「おれは春野さんを殺していない。追われる筋合いはないんだ」

志郎の手の中で、スマホが一度だけ鳴った。LINEの着信音だ。

藤元の携帯番号を覚えていなかったため、有美がコンビニで買った。

たバッテリーチャージャーでスマホの充電をしていた。

まずい、と志郎はスマホの側面にあるスイッチに触れた。

「居場所を探知されると面倒だ。いきなり本庁に連れていかれたら

——」

「橋口さん？」

何かありましたかと尋ねた有美に、志郎はスマホの画面を向けた。

「〃もとのな にける〃……どういう意味です？」

電源を切り、志郎はビルの外に出た。通りかかったタクシーを止めて有美と一緒に乗り込み、まっすぐ行ってください、と指示した。

顔を強ばらせた有美が見ている。LINEだ、と志郎は囁いた。

「藤元係長が戻るなど言ってる。逃げろと……なぜだ？ 話が違う。

あの人は——」

有美が運転席のシートに据え付けられていた液晶画面を指さした。そこに志郎の顔が映っていた。

〃大久保OL殺人事件の重要参考人〃とテロップが入り、その下を文字が流れている。橋口志郎巡查長、と名前もあった。

「君のスマホでニュースを見ることはできるか？」

有美がスマホを操作してアプリを呼び出し、ニュースサイトを開いた。トップページに〃警視庁現職刑事がOLを刺殺？〃 銀座近くで目撃〃とあった。

お客さん、と運転手がバックミラー越しに声をかけた。

「どうします？」

並木通りと晴海通りの交差点に出ていた。右へ行けば銀座一丁目、左は有楽町方面だ。

降ります、と志郎は言った。まだ五百メートルも走っていない。

怪訝な表情けげんを浮かべた運転手に、用事を思い出したと言いつきを口にしなから千円札で料金を支払った。

首を傾げている運転手から顔を背けてタクシーを降りた。目の前に銀座四丁目マルチビジョンがある。巨大な画面に志郎の顔が映っていた。

「……どうなってるんですか？」

マルチビジョンの映像に有美が目をやった。マスクに手を当て、顔が隠れているのを確かめたが、通りを歩く人々の目がすべて自分に向いているような気がした。

通りには人が溢れている。サラリーマン、OL、学生、主婦、子供、老人。

すれ違う人々の目を避けながら、志郎は速足で進んだ。人の列は途切れない。

東京の中心地、銀座だ。人がいない場所はない。

すれ違った男が携帯電話を耳に当てて何か話し出した。

立ち止まった女がスマホをスワイプしている。

女子高生が自撮りをして、笑っている。

周囲にいる数百人が警察に通報している。そんなはずがないとわかっていても、足が動かない。

すぐ横をミニバトが通り過ぎていった。駐車違反の取り締まりだ。

慌てて目を逸らした。交通課でも警察官は警察官だ。不審に思われただろうか。

背を向けて路地に入ろうとしたが、制服姿のガードマンに制止された。

「すいません、この先で電気工事をやっています……」

志郎は顔を伏せたまま通りに戻った。不自然とわかっていても、顔を隠さないではいられなかった。

なぜ銀座にいとマスコミが知っているのか。藤元にかけた電話を逆探知したのは品川桜署の担当者だろうか、情報をリークする理由はない。

春野博美殺しの現場にいたことは事実だ。本庁が事情を聞きたいと考えているのもわかるが、いきなり重要参考人扱いで、テレビに顔写真を流すことなどあり得ない。

人権無視というレベルではない。どんな理由があっても、証拠もなしに個人情報オープンにしていいはずがない。

「裏切り者がいる」

志郎のつぶやきに、有美が顔を向けた。おれを春野博美殺しの犯人にするつもりだ、と志郎は小声で言った。

「だが、理由がわからない。そんなことをしたって、誰の得にもならないんだ」

顔を隠しながら歩き続けた。誰かに見られていないか、気づかれていないか、通報されていないか。立ち止まることができなかった。

本庁は志郎の確保に大量の警察官を動員している。銀座周辺に千人以上の警察官を投入しているのかもしれない。

他にもある、と志郎は顔を上げた。至るところに防犯カメラが設置されていた。

デパート、コンビニ、店舗、信号機、ATM。撮影した画像データを解析するための人員も集められているはずだ

銀座にいる、と志郎は電話で藤元に話していた。逆探知されたのは間違いない。

オンにしたスマホの電波を辿った可能性もある。志郎がどこにいるのか突き止めるのは簡単だ。

誰が指揮を執っているにしても、と志郎は額に指を押し当てた。

まず、銀座周辺を包囲するだろう。大きく網を張り、当該区域を

徹底的に搜索すれば、必ず確保できる。タクシーに乗っていたら、

検問に引っ掛かったはずだ。

「待ってください……どうするつもりですか？」

腕を掴まれて立ち止まった。有美が不安そうに見ている。

どこにも行けない、と志郎は首を振った。

「タクシーも使えない。駅も駄目だ。警察は真っ先に交通機関を押さえる。逃げ場はない」

「どうしてそんな……」

わからない、と志郎は左右に目を向けた。

「警視庁はおれを追っている。ホテルや店にも入れない。銀座に隠れる場所はないんだ。奴らが全部押さえている。どうにもならない」

「橋口さんは警察がどう動くかわかっているんですよね？ それなら、裏をかけば……」

無駄だ、と志郎は肩をすくめた。

「君も公務員なら組織の力はわかっているはずだ。四万二千人の警察官を相手に逃げきれないわけがない。しかも、奴らはおれの顔写真を公表している。銀座にいるすべての人間が監視者になったのと同じだ。なぜ、ここまでする？」

自分から出頭するべきです、と有美が言った。

「あなたは春野さんを殺していません。それを話せば、わかってくれる人がいるはずですよ」

警視庁もそこまで腐ってはいない、と志郎はうなずいた。

「いずれは真相がわかるはずだ。だが……何かが違う。おれを陥れようとしている奴がいるんだ。目的はわからないが、おれの動きを妨害したいと考えている。何のためにそんなことをする？」

ビルとビルの間に入った。通行人は多いが、そこだけがエアポケットになっていた。

出頭するわけにはいかない、と志郎はマスクの位置を直した。

「おれを足止めするのが目的なんだ。出頭すれば思う壺だ……意図がわからない。おれは所轄の刑事に過ぎない。何ができるわけでもないのに……」

有美が路地の左右に目を向けた。入ってくる者はいない。

「だが、ここにいってもいずれは見つかる。銀座は警視庁が制圧している。ビル、店、レストラン、サウナ、ホテル、至るところにカメラがある。顔認識ソフトを使って調べれば、いつ見つかったもおかしくない。本庁は即応体制を整えている……誰の命令だ？ 所轄の署長レベルじゃない。捜査一課長でも、ここまでではできない」

「では誰が？」

本庁のトップだ、と志郎は言った。

「警視総監とは言わないが、それに準ずるクラスだ。だが、所轄の巡査長を捜すために、東京中の全警察官に動員をかけるような無茶

をするはずがない。奴らは警察官僚だ。こんなことをしたら、絶対に責任を問われる。マイナスにしかならないとわかっているはずなのに……」

「官僚が保身を考えるのは、わたしもわかります」

品川桜署にも本庁から誰かが来ているはずだ、と志郎は大きく息を吐いた。

「一課長か理事官、管理官クラスだろう。おれを見つけるために指揮を執っている」志郎は手の中のスマホを見つめた。「藤元係長は命令に従い、戻ってこいとおれに言ったが、それは見せかけだった。何かおかしいと感じた。だから、すぐにLINEを送ってきたんだ」

「すぐ？ 他にも人がいたはずですよ。目の前でLINEを送ったんですか？」

違う、と志郎は首を振った。

「係長は親ばかりで、それは本人も認めている。娘にLINEをブラインドで打つやり方を教わったと自慢していた。机の下か、ポケットの中で文章を打ったんだ。本庁の連中が刑事系の電話をすべてチェックしているから、電話で警告することはできない。だからLINEを送ったんだろう」

どこにも逃げられません、と有美がため息をついた。

「マルチビジョンに橋口さんの写真が出ているぐらいです。ネット

でも顔写真が出回っているでしょう。橋口さんの友達、知人、親戚まで手が回っていてもおかしくありません。近づいただけで見つかります」

「どっちにしても遠くまでは行けない。交通手段がないんだ。今は銀座全体を包囲しているんだろうが、網を縮めるのが警察の常套手段だ。いずれは見つかる」

「どうするんです？」

ひとつだけ当てがある、と志郎はマスクを確かめた。

「行こう。遠くはない」

顔を伏せたまま歩きだした。夕闇が迫っていた。

(続く)